

保育者養成校における表現活動に関する一考察

「保育内容表現」の授業実践から

古川 洋子
愛知学泉大学

Study of how to teach "Expression" in Childcare and Education Focusing on teaching practice with Expression for Childcare and Education

Yoko Furukawa

キーワード：幼稚園教育要領 Course of study for Kindergarten 5領域 Five Areas
保育教材 Childcare materials

1. はじめに

1956年に幼稚園教育要領が制定され、保育内容は「健康」「社会」「自然」「言葉」「音楽リズム」「絵画製作」の6領域とした。その後、1989年に幼稚園教育要領が改訂され、保育内容「表現」という言葉が使われた。民秋（2014）は、次のように述べている。

先の「六領域」が「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の「五領域」に変更された。これは、従来からの『六領域』は小学校教育での教科に準じている、それとまぎらわしい、などといった誤解も含めての批判にも対応するものとして新たな視点からの組み立てであった。そして、幼稚園教育の「ねらい」を「幼稚園修了までに育つことが期待される心情、意欲、態度など」としている点は、保育の特質をよく示している説明である¹⁾。

2018年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定された。今回の改定では、旧保育所保育指針の第2章にあった「子どもの発達」の記載がなくなり「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」が、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領とほぼ共通化された。さらに、幼稚園教育要領にはないが、「乳児」、「1歳以上3歳未満児」の保育の内容に関することが細かく示されている。

本研究では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、

幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、ほぼ共通化された3歳以上児の保育内容「表現」に着目し、保育内容「表現A」での取り組みを検証、考察することを通し、今後のよりよい授業のあり方について検討することを目的とする。

2. 領域「表現」のねらいと内容

(1) 保育所保育指針の領域「表現」

保育所保育指針の「第2章 保育の内容」では、「乳児保育」、「1歳以上3歳未満児の保育」、「3歳以上児の保育」の3つの領域にわけて、「ねらい及び内容」を示している。「乳児保育」では、「表現」の項目はないが、「ウ 身近なものに関わり感性が育つ」として示されている。「1歳以上3歳未満児の保育」では、次のように示されている。

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

(ア) ねらい

- ① 身体の諸感覚を豊かにし、様々な感覚を味わう。
- ② 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。
- ③ 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。

(イ) 内容

- ① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽

- しむ。
- ②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
 - ③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。
 - ④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。
 - ⑤保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。
 - ⑥生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。

無藤(2018)は、「3歳以上児のねらいや内容とほぼ重なるが、『感性をもつ』ではなく、感性の受容体である『感覚』という語を使って『感覚を味わう』としており、より基礎となる体験が重視されていることが示唆される。」²⁾と述べている。

(2) 幼稚園教育要領の領域「表現」

「はじめに」でも記載したが、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」が、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・要領とほぼ共通化され、次のように示されている。

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。

- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

ねらいを達成するための指導事項は、「内容」として8項目が挙げられている。無藤(2018)は、「8項目すべての文末を見てみると、すべての子どもが主人公の文章になっている。つまり『楽しむ』も、『味わう』も、『遊ぶ』も、子ども自身が主体となって体験することなのである。保育者の指導とは『させる』とか『提案する』などではなく、子ども自ら楽しんだりあじわったりする状況になるような環境を整え支援する役割をするということである。」³⁾と述べている。

子供が自ら楽しむ環境を保育者が整えることで、子供は積極的に表現したくなるだろう。環境を整えることがどういうことなのか、学生にどう伝えると理解できるのが課題である。さらに、子供の表現の仕方は様々である。保育者は、子供の発達や、興味、関心、天候や季節に合わせて環境を整えることも保育者の役割である。環境をどのように整えることで、子供の表現活動が生き生きするのか、保育内容「表現A」の授業を通して、学生に学んで欲しい。

3. 保育内容「表現A」での取り組み

保育内容「表現A」の授業では、保育内容の各領域を総合的に捉え、表現活動を中心に幼児の実態に応じた保育内容の展開や指導方法を学ぶ。また、保育者は、幼児が心躍るような環境を整えることが求められている。授業のなかで体験的に学習することで、教材研究をおこなう。さらに、作るだけではなく人前で演じる技術と方法を学び、学生自身が演じることを楽しみ、実践力を身につけることを目的としている。

(1) 学生が表現する場

こどもの生活専攻では、保育内容「表現A」は1年前期で開講する。保育について、勉強が始まった

ばかりの学生が対象だ。まずは、「感性とは」、「創造性とは」から始まる。学生に、最初の授業で、「最近感動したことがありますか？」と、質問をする。「最近感動していない」と、答える学生も少なくない。わずかな人数ではあるが、「嬉しい」「楽しい」「悲しい」と、最近感じる事がないと答える学生もいる。まずは、学生自身が、「表現」したくなるような感動体験を積み重ねることが必要だ。表1は、「表現A」のおおまかな授業内容である。

表1 表現A 授業内容

1	オリエンテーション
2	保育内容「表現」とは
3	・幼稚園教育要領、保育所保育指針から、保育内容「表現」を詳しく読み取る。
4	DVD視聴 子供の感性と表現を育む保育者とは
5	生命に関する感性と表現
6	課題に取り組む① ・新聞紙で遊ぶ
7	課題に取り組む② ・糸とじ絵本を作ろう
8	課題に取り組む③ ・ごっこあそびが楽しくなる道具
9	課題に取り組む④ ・身近な素材で玩具をつくろう
10	課題に取り組む⑤ ・はじめてのはさみ
11	課題に取り組む⑥ ・1.2歳の子どもが楽しめるミニパネルシアターをグループで制作する。
12	課題に取り組む⑦ ・1.2歳の子どもが楽しめるミニパネルシアターをグループで制作する。
13	課題に取り組む⑧ ・1.2歳の子どもが楽しめるミニパネルシアターをグループで制作する。
14	制作したものを使って発表
15	

5月の連休を利用して、学生自身が感動したことを写真におさめ、プリントアウトした写真を画用紙

に貼り、作成した物を見せながら発表をする機会を設けた。表現することが苦手な学生にとって、出会ったばかりの同級生のなかで表現することは、受け身になってしまいがちであるが、できる限り表現する場を設けることを意識している。

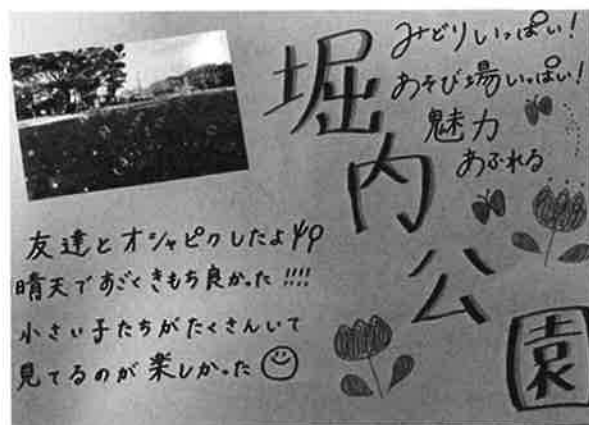


写真1 作品例

7回目に行う糸とじ絵本は、保育実習でも使うことができる「自己紹介絵本」を作る。様々な方法で、子供に伝わる自己紹介を意識して、内容を考える。針を使って画用紙に糸を通し、糸とじ絵本を作ることによって、オリジナルの「自己紹介絵本」が完成する。子供は、サイン帳や塗り絵、絵本を作ったりする。ホッチキスやセロテープを使って、作ることも悪くはないが、糸とじ絵本を作った学生から温かみがあると好評だ。

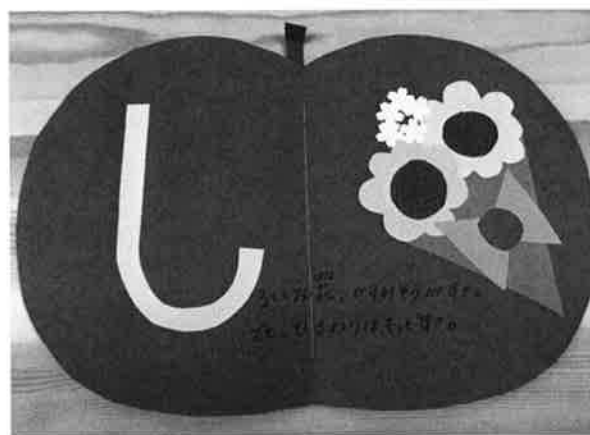



写真2 作品例

(2) 身近な素材で玩具をつくろう

9回目に行う「身近な素材で玩具をつくろう」というテーマで、学生自身が様々な素材に興味をもつ取り組みを行っている。最近では、100円ショップなどで、材料がすぐ手に入るが、廃材などを使って課

題に取り組む。学生にとって不要な物が、様々な素材を組み合わせることで、形になる驚きや、楽しさを経験する。

身近な素材を使って製作しよう!

〈対象年齢〉	〈製作した物〉	〈製作方法〉
年少(3才児)		2つのペットボトルのふたのふたをそれぞれ、1.5センチずつの幅に、スチンクテープでくっつける。 ↓ その間に2つのペットボトルのふたにそれぞれ、1.5センチ幅のシール(目と口)を貼る。 ※この時、何重か重ねる。 ↓ 同じ幅のシールテープを、テープに貼り付け、シールを貼る。たら完成!
〈子どもが製作する時に教員が配慮すること〉		この場合、3才児の子供(3歳児)!
○スチンクテープやシールテープを切り、使った後、 剥がすの時に注意が必要。		

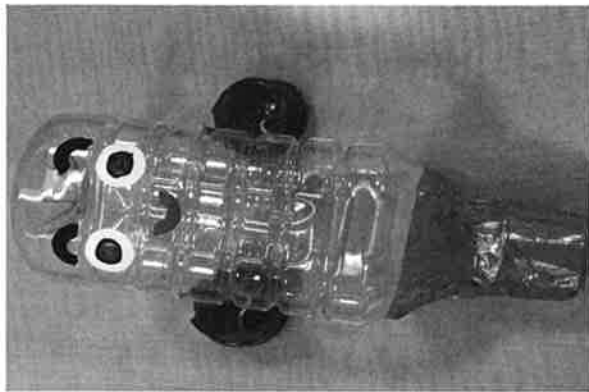


写真3 ペットボトルで作ったでんでん太鼓



写真4

カプセルトイが入っていたケースで作った玩具

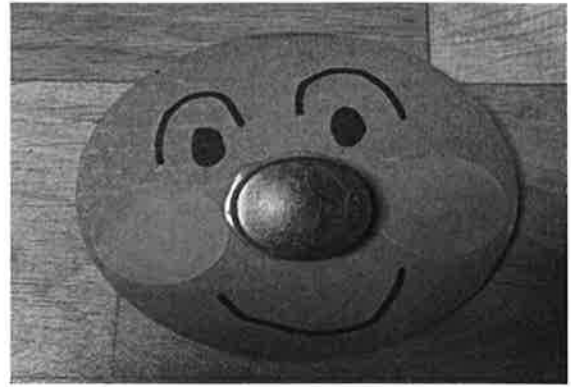


写真5 ペットボトルのふたで作ったコマ

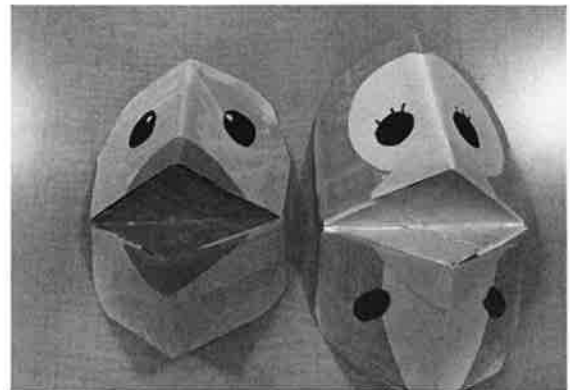


写真6 牛乳パックで作ったパクパク

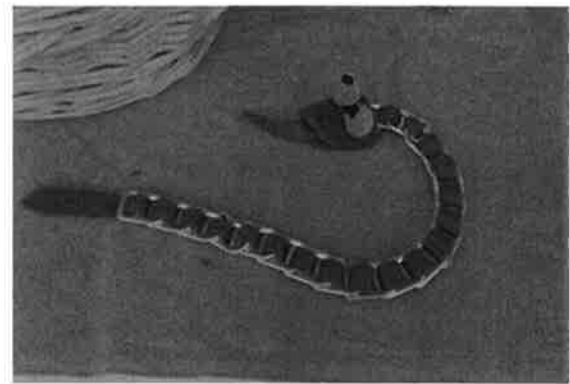


写真7 プルタブとフェルトで作ったヘビ

(学生の感想：原文のまま)

・廃材を利用して製作すると先生から言われてから、捨てると思ったカップや箱が使えるかとも思うようになった。どんな物が作れるか想像できなかったが、友達が持ってきた物と組み合わせたら面白いものができた。考えたり作っているとき、とても楽しかったです。

・絵を書いたり、つくったりすることが苦手だから、表現の授業はシラバスを見て心配だった。今回の活

動は、廃材を利用して作ることが目的だったが、イメージがわからなかった。先生が幼稚園の子供が作った物の写真を見せてくれた時に、自分はトイレトペーパーで鉄砲を作ったり、お菓子の箱でロボット作っていたことを思い出した。大人にとってゴミだと思える物が子供にとって遊びの材料になることがわかった。

・プリンのカップや、ヨーグルトのカップでマラカスやけん玉を作った。色をぬったり、シールをはったりするだけで楽しいおもちゃができた。自分で作ったもので遊ぶことができるから、きっと子どももうれしいと思う。でも、小さい子どもが使うから楽しいだけではなく、安全面も配慮しなければならないこともわかった。

身近な素材で作った作品には正解はなく、同じ材料でも、まったく違うものを学生は製作していた。最初は、戸惑っていた学生も、何か作ってみようという気持ちに変化している。製作中は、「先生見て」と、製作した物を嬉しそうに見せる学生もいる。製作する手が止まっている学生には「〇〇も使ってみる」と、声をかけることもある。このような体験のなかで、学生自身が子供の製作活動をイメージし、子供への働きかけを考えて欲しい。また、学生が製作した物を展示し、実際に製作した物で遊ぶことで、同級生が製作した物に興味を持ち、今後の製作活動に対して意欲的になって欲しいと考える。しかし、内容によっては、製作することを学生が楽しむことだけで、終わることもある。それを改善するためにも新たな試みをお



写真8 活動の様子



写真9 活動の様子

こなった。

(3) 子供の活動を考える

道具や素材によって、表現する内容が変わったり、もっと違う表現方法を子供は、見つけだしたりすることもある。子供の表現活動が生きていくためには、保育者が教材の在り方、教材の捉え方を広げていくことが大切である。『実践！造形あそび』⁴⁾を参考にし、実際に学生が、「はじめてのはさみ」の活動をおこない、ねらいとして挙げた、3つのうち2つのねらい、「はさみの使い方を知る」、「きれたときの喜びや達成感を味わう」に対して、どのような働きかけができるのか、学生とやりとりした事柄をここでは報告する。

5月29日(火)
テーマ：はじめてのはさみ(3歳児)
ねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・はさみの使い方を知る ・きれたときの喜びや達成感を味わう ・形を組み合わせて表現することを楽しむ

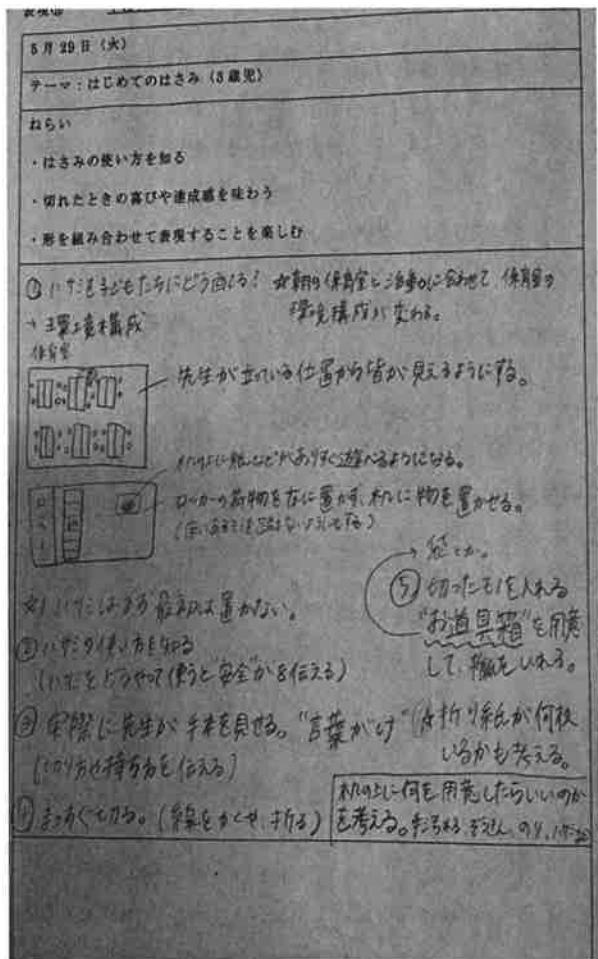


写真10 「はじめてのはさみ」活動内容

年少児が、はじめて集団の中ではさみを使う活動である。事前にテーマとねらいを伝え、どのような活動ができるか、プリントに記載して授業にのぞむ。それぞれが考えたことを発表し、実際にどんな流れで活動を行うかアイデアを出し合い、指導案を作成する。1年前期の授業のため、指導案といえるようなものではないが、環境構成、必要な材料、子供への言葉がけなど、ねらいが達成できる活動内容を考える。

「はさみの使い方を知る」が1つ目のねらいである。3歳の子供が活動内容に興味を持つためには、どのような環境であるか、子供にどのような言葉がけなどをしたらよいかを考える。また、使い方を間違えるとハサミでけがをすることもあろう。特に、安全面の配慮も考えなければいけない。

〈学生の言葉〉

- ・先がとがっているから危ないことを伝えよう
- ・私が保育園の時、牛乳パックで作った箱にはさみが入ってて、机に置いてあったよ
- ・友達にとがった先を向けないように注意したほうがいいよね
- ・手を入れるところが眼鏡みたいだから「眼鏡のところを持ってね」はどうか
- ・初めてはさみを持つ子もいるかもしれないから、はさみの持ち方の説明はいるよね
- ・色々説明してもわからないから、紙を切りながら説明したらどうかな

2つ目のねらいである、「きれたときの喜びや達成感を味わう」は、「やってみよう」という意欲を引き出す工夫が重要になる。子供の姿をイメージしながら、次第にどんな援助ができるのか、それぞれが意見を出し合っていた。

〈学生の言葉〉

- ・色々な色の折り紙を準備しよう
- ・何枚折り紙用意するといいかな
- ・線が引いてあったほうが切りやすいよね
- ・切る紙の大きさはどのくらいがいいのかな
- ・うまく切れない子にはどうする
- ・褒めるのってあんがい難しいよね
- ・じょうずだね、よくできたねしかうかばない

- ・はさみが苦手な子にはどうしたらいいのかな
- ・一緒に切ってあげたほうがいいかな
- ・切った物をしまう箱や袋を準備しよう

学生が製作する際は、問題なく活動できることであっても、3歳児がはさみを使って活動をおこなうとなると、様々な状況を想定しなければならないことに学生は気付く。この活動中に、「保育者って色々と考えて大変だね」と、学生がつぶやいていた。子供が活動に興味をもち、活動をスムーズにおこなうためには、保育者による配慮が大きく影響していることに気付いた、学生のつぶやきではないだろうか。

(4) パネルシアターの作成

子供に保育者が話をする際、シアターを活用することで、絵や人形に助けられストーリーが展開しやすくなる。シアターの魅力は、子供は演じる保育者の表情を見ることができ、保育者も子供と共有して楽しむことができる。「表現A」の授業では、「1.2歳の子どもが楽しめるミニパネルシアター」をグループで作成する。パネルシアターは、



写真 11 活動の様子



写真 12 活動の様子

パネル板に、絵人形を貼ったり、外したりして、物語や歌を歌ったり、クイズをしたり、様々な表現方法で子供たちを楽しませることができる。また、パネルシアターの魅力は、歌ったり踊ったり、応答したりすることで、子供の感じたことを保育者が言葉として引き出すことができる。また、保育者の様々な演出を見ることで、「次はなにかな」「どうなるのかな」と、子供の興味や関心が高まる。その結果、子供は集中して保育者の動きを観察し、次の話の展開を想像するようになってくる。さらに、「自

分も作りたい」「やってみたい」という気持ちに繋がっていく。子供の中には、登場させたいキャラクターを作り、オリジナルの話を展開し、保育者のシアター活動から表現する力を身につける子供もいる。

学生は、パネルシアター作成後、同級生の前で演じる。しかし、同級生の前だと恥ずかしく、うまく演じることができなかつたと感想に書く学生が多い。なるべく、子供の前で演じる経験をして欲しく、「岡崎げんき館」で、子供や保護者の前で活動をする機会を設けている。学生は何度も練習を重ねて、「岡崎げんき館」に出向くが、最初は不安な表情をしている学生がほとんどである。しかし、子供の前で演じ始めると次第に表情が豊かになり、自然に体が動いている。学生のなかには、子供の反応にこたえたり、子供に話しかけたりしながら、子供たちと一体となって活動をおこなっている。また、活動が終わった後、学生が作成した絵人形に興味を持った子供が、パネル板に絵人形を貼って遊ぶこともある。学生の真似をして、子供が絵人形をパネル板にペタペタ貼って楽しんでいる。そのような子供の姿を間近で見ることが、表現活動への意欲に繋がっている。

4. 今後の課題

保育内容「表現 A」では、学生が様々な素材に興味を持つような活動を取り入れている。時には、教室から外に出て、学生が見つけた物で製作をする。葉っぱや、石、木の棒、木の実などを使って、それぞれの思いで作品を作る。しかし、イメージ



写真 13 活動の様子

がわからない学生は、手が進まず何をどうしていいのかわからない状況である。最近は、「スマフォ見ていい」と尋ねてくる学生も多く、自分で考えようとしない。その理由の一つは、「作ったり、書いたりするときに褒められたことがない」ことが学生の話から考えられる。しかし、子供を観察すると、遊びのなかで自分なりに表現をしていることが多い。園庭で拾った木の棒が魔法の棒になったり、一枚の大きな布がヒーロのマントになったりする。そのような姿は、子供にとって自然な姿

なのかもしれない。多くの子供は遊びに夢中になればなるほど、自分なりに表現しようとしている。そのことから、保育者は最終的な作品の形ではなく、表現しているときの子供の喜びや工夫に気づき、しっかりと受け止めることで、子供の表現活動に対する意識が変わることを学生に伝えていかなければならない。

写真 13 は、紙コップを使った活動の様子である。学生の表情から夢中になって楽しんでいる様子が伝わってくる。また、ここでは触れていないが、3歳児をイメージして誕生日の壁面を製作した。学生は、「自分の作った物が貼られていると嬉しいね」と、話していた。学生の行動や言葉から、最初は、苦手だった表現活動に興味を持って取り組むようになってくる。また、自分が楽しむだけではなく、どのような環境を用意し、どのような言葉がけをしていくのかなど、細かく考えるようになった。

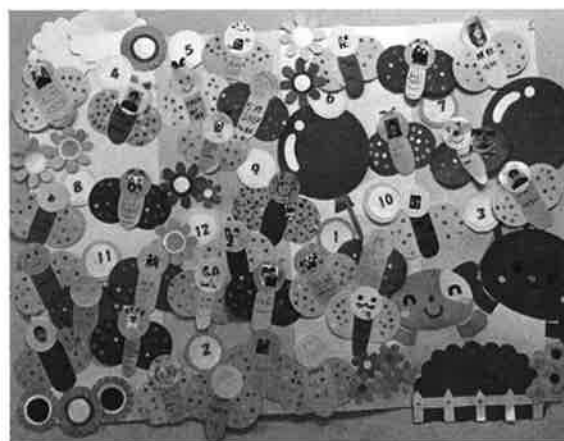


写真 14 誕生日の壁面

「表現」とは、造形や音楽などの芸術的な表現だけではなく、絵本を読んだり、パネルシアターやペープサートを演じたり、保育者の仕草や行動すべてが表現である。そう考えると、保育者はいつも子どもの前で表現していることになる。そのことから、学生自身が表現する楽しさや喜びなどを感じ、保育者が子供の気持ちを受け止めることが、子供の表現活動の支えになることを学生自身が体感できる授業でありたいと考える。

引用文献

- 1) 民明言:『幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立』萌文書林 P9 (2014)
- 2) 浜口順子編著:『表現』萌文書林 P.43 (2018)

- 3) 前掲
- 4) 平田智久監修：『実践！造形あそび』ナツメ社

参考文献

- 1) おかもとみわこ 石田敏和編著：『造形表現』一藝社
(2018)
- 2) 田澤里喜：『表現の指導法』玉川大学出版（2014）
- 3) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説書』フレーベル館
(2018)